

# 「只尽凡心開天地」

館 龍一郎

私が大平さんに初めてお目にかかったのはいつのことであつたか、いまはさだかでないが、大平さんが大蔵大臣のときの、金融制度調査会であつたか税制調査会であつたかの答申後の懇親パーティーの席であつた。

私自身どちらかという人見知りが強く、こういう席は苦手の方なのであるが、そのときは多少アルコールが入っていたこともあつたからであらう、当時次官であつた高木文雄さんに、僕はまだ大平さんに正式に挨拶したことがないので紹介して下さい、といって、紹介していただいたのが最初であつた。

大変リラックスしてパーティーの席にしてはゆっくり話をされたのだが、どんな話をしたのか、いまでは全く思い出せないのである。ただ、政治家にも、といって私がたくさんの政治家を知っているというわけではないのだが、有名な政治家にもこんなにシャイで魅力のある人がいるのか、という印象だけは極めて鮮明に残つたのである。

その後、個人的にお話をする機会もあつたが、その印象は強まりはしたものの変わることはなかつたのである。

だから大平さんが総理大臣になられたときの私の率直な感想は、「苦勞さまということであつた。そんなとき、大平さんの個人的な諮問機関としての政策研究会の構想が持ち上がり、私に「文化の時代の経済運営」という研究会の座長をやれという話があり、幹事の方々の熱心な勧誘を受けたのである。

ただ、私には「文化の時代」ということがよく分らないということもあつて、そこでの経済運営となるとさ

っぱりイメージが湧いてこないで、お引き受けすべきかどうか、大変迷ったのである。ただ、一方、一内閣の政策ということではなく、将来にわたる経済運営について各方面の人と自由に議論することには大きな意味もあり、また、大平さんに魅力を感じていたということもあって座長の役を引き受けることにしたのである。

報告書発表後の記者会見の際にも述べたように、最初は、だから、今後の経済運営のあり方について、日頃は余りお目にかかれぬ分野の人々を含めて議論をし、将来の方策を探ってみようというのが私のいつわらざる気持だったのである。しかし、このような気持で引き受けた研究会ではあったが、私は、やがて、今後の時代を文化の時代として受け止めるという考え方に、大平さんの卓見というが洞察力を見るようになり、あらためて敬意を表するにいたったのである。

というのは、政治の時代、経済の時代について文化の時代がくるということではなく、おそらく、最近の世界の動向は、相対的な安定の時代につづく動乱の時代を意識・無意識のうちに予想した保守化の傾向を色濃く示しているが、これを保守反動の時代とすることなく、前向きに文化の時代・平和の時代として受け止め、保守ではあっても反動の時代とはしないという姿勢は、これは他の人には真似のできない卓見であり、立派なそして明確な一つの姿勢だからである。そして、この感は、大平さん亡き後の世界の動向を見るにつけてますます深まってくるのである。

無理にお願ひした色紙に、大平さんは、「只平凡心開天地」と書いて下さったのであるが、その句、その筆跡に、大平さんの誠実な人柄がにじみ出て、私には他人事でない気持が感じられるのである。  
(東京大学教授)